

緯書における地理的世界観の考察

— 特に大九州説について —

安 居 香 山

緯書における地理的世界観の考察は、鄒衍のそれを離れては考えられぬと共に、鄒衍の地理的世界観の考察は、緯書のそれを理解することなくしては、充分把握し得ない。両者には、それほど密接な関係が考えられる。鄒衍の地理的世界観の考察は、既に先人の論考もあるのであるが、緯書思想との関聯については、あまり明瞭にされてない。従って、その理解を却って煩瑣にさえしている点も、見受けられる。鄒衍の地理的世界観の理解は、むしろ、時代的にも近く、しかも鄒衍の思想の継承の上に立てられたであろう緯書の地理的世界観を傍証資料として、遂げらるべきであろう。ここでは、その中、特に大九州説について、綜集し得た緯書を直接資料として、鄒衍の地理的世界観と関聯しつつ、緯書の大九州説について考えてみたい。

周知の如く鄒衍の大九州説は、今日、史記の孟子荀卿列伝の鄒衍伝中に残見する。すなわち次の如きものである。

儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳、中國名曰赤臬神州、赤臬神州内自有九州、禹之序九州是也、不得為九州數、中國外如赤臬神州者九、乃所謂九州也、於是有一裨海環之、人民禽獸、莫能相通者、如一區中者、乃為一州、如此者九、乃有大瀛海環其外、天地之際焉、

右の内容は、その表現が複雑なため、その理解の仕方により、種々な問題がある。いま従来行われている理解に基づいて訳するとき、略次の如くなる。

「儒者のいう中国は、天下の八十一分の一を占めるに過ぎない。(鄒衍のいう)中国は、名づけて赤臬神州という。赤臬神州の内には自ら九州があり、禹の秩序だてた九州がそれである。これは州の数に入れることができない

い。中国の外には、赤泉神州の如きものが九つある。これが乃ち九州である。ここでは、裨海がこれを取り巻いている。人民禽獸は、その外と往来することができない。このような一区域を為しているものが、又一つの州をなし、このようなものが九つあって、大瀛海がその外を取り巻いている。これが天地の界限である。」

右の中、「不_レ得_レ為_二州數_一」を「州の數に入れることができない」としたが、果してどういう意味か明瞭でない。「禹の九州の如きは、大九州からすれば州の數にも入らぬものである」とでもいう意味であらうか。或はこれは、「不_レ得_レ為_二州數_一」として、「州として數えることができない」すなわち「禹の九州の如きは、州の概念(海に取り巻かれたものとしての州)では、數えることができないものである」とでもいう意味であらうか。

ところで、この一部分の理解の如きは、鄒衍の大九州説がどんなものであるかを理解するのに直接影響するものではないため、そのいづれをとるとしてもよいのであるが、前述の全文の訳に見る如き理解をするとしても、そこには數多くの疑問が残されてくる。

まず、鄒衍のいう中国すなわち赤泉神州は、すなわち禹の九州ということになるが、それでは儒者のいう中国は、何に当るのか。またそれが天下の八十一分の一に相当するとされるのは、一体何との比較においていわれているので

あるかが問題とされてくる。前述の理解の如くであるとすれば、鄒衍の世界の構造は、赤泉神州の如きものが九つ集ったものが一州を為し、またこれを一区(これが小九州とされるもの)と名づけられ、これが九つ集ったものが世界(大九州とされるもの)を為していることになる。従つて、赤泉神州は、大九州の八十一分の一に相当することとなる。大九州すなわち天下とすると、結局儒者のいう中国と同面積となる。しかし、鄒衍は、儒者のいう中国觀の狭小さを批判しているのであるから、両者が同面積であるはずがない。こうした問題を、如何に理解すべきであらうか。

また、今仮りに、「如一区中の者(九州)の如きは、乃ち(夫々海に囲まれた)一州を為し」と解するときは、赤泉神州の如きものが九つ集ったものがすなわち世界(大九州)ということになる。しかるときは、儒者のいわゆる中国なるものは、その八十一分の一、すなわち、禹の九州中の一州との面積比ということになり、あまりに小さなものとなり過ぎる。

こうした種々の問題があるばかりでなく、ここでは、九州の位置關係については、一向に明らかにされてい^(註)ない。

ところで、鄒衍の大九州説については史記のとは別に、王充の論衡に引用されたものがある。果してそれではどうであらうか。

王充が鄒衍の大九州説を批判する中に、「鄒衍の書に言う」として引用しているのは左の如き文である。(字句上に三問題もあるので、劉昉遂の校勘を並記して掲げた。)

(1) 天下有^二九州^一、禹貢之上、所謂九州也、禹貢九州、所謂一州也、若^二禹貢以上^一者九焉、禹貢九州、方今天下九州也、在^二東南隅^一、名曰^二赤泉神州^一、復更有^二八州^一、每一州者四海環^レ之、名曰^二裨海^一、九州之外、更有^二瀛海^一、

(論衡、談天篇)

[注] 昉遂案、此二句(禹貢之上、所謂九州也)疑衍、下文禹貢九州所謂一州也、若禹貢以上者九焉、此禹貢之上、即禹貢以上之譌、所謂九州也、即所謂一州也之譌、

(2) 九州之内五千里、竟合為^二一州^一、在^二東東位^一、名曰^二赤泉州^一、自有^二九州^一者九焉、九九八十一、凡八十一州、

(論衡、難歲)

[注] 孫人和曰、在^二東東位^一、當作^レ在^二東南位^一、下文云、使^レ如^二鄒衍之論^一、則天下九州在^二東南位^一、

右の文の中、(1)の「禹貢之上、所謂九州也」は、意味が通じ難いため、劉氏に従って衍文としてこれを除き、全文を解すると、天下に九州があり、禹の九州はその中の一州で、またこれは赤泉神州と名づけられて、東南隅に位置しているということになる。これは、史記の鄒衍説の小九州だけを世界と考へた構成を説いていることとなる。しかも

ここでは、中国なるものが、そのいづれに相当するものであるか、明らかでない。

しかし、「復更有八州」という所を、上述の小九州の如きものが、「復更に八州ある」と解するならば、大九州を述べていることとなる。^(注)この点、如何に解すべきか、明らかでない。

またここでは、赤泉神州が、東南隅にあることが指摘されているが、これは史記にはなかつたものである。この説がどうして王充の引用説の中に入ってきたかが、新たな問題として出てくることとなる。

以上の如き諸種の疑問は、限られた鄒衍資料では、今日のところ、解明することはできない。しかるに、ここに鄒衍説に密接に関連する内容のものとして、緯書の地理的世界観が見い出される。ところで、緯書形成については、種々の^(注)ケースが考へられるのであるが、方士との密接な関係と共に、鄒子一派が、これが形成に与つた面があるのではないかとすることは、既に陳繁^(注)氏の考究されている通りである。したがって、緯書の地理的世界観に、鄒衍のそれと密接な類似が見い出されることは、また当然といわねばならない。故に、緯書の大九州説を解明するならば、鄒衍説に見られた諸種の疑問も、亦解明されるであろうことが考へられる。よつて次に、緯書の大九州説について考へてみたい。

緯書において地理的世界觀を述べるものほとんどは、河図括地象に見い出される。これは、括地象なるものが、「諸の地勢を審にして」総括した内容のものであるとされている如く、世界の地理的構造を明らかにしたものであるためである。

この中で、大九州説を述べるものとしては、まず左の如きものをあげることができる。

凡天下有二九區、別有二九州、中國九州、名二赤隰神州、即禹之九州也、上云九州八柱、即大九州也、非禹貢赤隰小九州也、

(河図括地象―緯書集成―河図類 P 5)

右の文も、なかなか理解し難い。特に緯書資料が佚文から輯められたものであるため、完全な姿として残っているかが疑問であるからなおさらである。ともかく、右を意訳するならば、次の如くなると考える。

「凡そ天下には九区がある。(その一区が)別れて九州となつてゐる。中国の九州は、赤隰の神州と名づけられる。すなわち禹の九州である。上に言う九州八柱は、大九州である。禹貢の(属している)赤隰の小九州ではない。」

ここで特に、中国の九州を敢えて「赤隰の神州」とした

ことは、次の如き緯書の文より考へるとき、神州は赤隰内の一州であると考へられるからである。

崑崙之墟、下洞含右、赤隰之州、是為中、則東南神州、正南邛州、西南戎州、正西弇州、正中冀州、西北括州、正北濟州、東北薄州、正東陽州、

(河図括地象―緯書集成―河図類 P 13)

これによれば、「赤隰之州」というものがあり、しかもそれが「中」にあり、その中に神州、邛州などの九州が考へられているようである。中国はこの中、いわゆる東南に位する神州に相当すると考へているのである。ここで東南という方位が明瞭にされているのが注目される。この内容より考へるとき、赤隰の州とは、史記鄒衍説の一区に相当する如くであり、従つて、中国は、赤隰の中の一州、すなわち「赤隰の神州」と考へられていたのではなからうか。そして、赤隰は「是為中」とある如く、九区の中心にあつたと考へていたのではあるまいか。

ここに、「崑崙之墟、下洞含右」とあることが何を意味しているか分らぬが、右は或は石の誤りかも知れない。ところで緯書では、崑崙は、世界の中心に位すると考へていた。すなわち

崑崙者、地之中也、地下有二八柱、柱広十萬里、有三千六百軸、互相牽制、名山大川、弘穴相通、

(河図括地象―緯書集成―河図類 P 12)

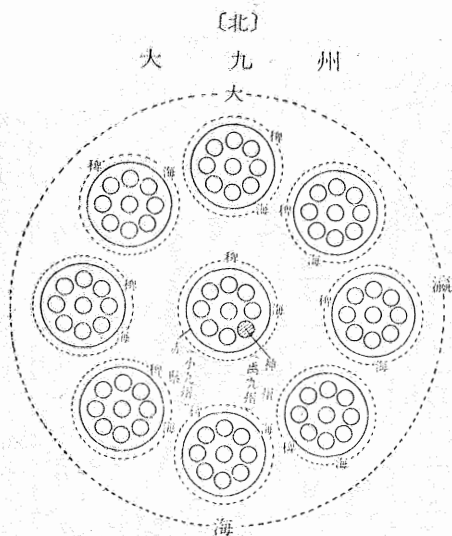
とあるのがそれである。したがって、先掲の括地象に「上云九州八柱、即大九州也」とあるのは、崑崙を中心とし、地下は八柱にて支えられている世界、すなわち、大九州をいっているのである。赤梟の州が、大九州の中心にある。こ
とよりすれば、崑崙は、また赤梟の中心でもあるというこ
とになる。したがって

崑崙東南、地方五千里、名神州、

(河國括地象―初學記卷八 御覽百五十七引)

とある如く、赤梟の州の東南にある神州は、また崑崙の東
南にあることもなるのである。

今この關係を图示すると次の如くなる。



○印は、
便宜的に
その位置
關係を示
したもので、地形
が円形で
あること
を意味し
たもので
ない。

こうした九州説は、禹貢の九州説の考え方を基調とし、その演繹のもとに構成されたものであるが、赤梟の州の中の九州の名は、禹貢の冀・青・徐・揚・荆・予・梁・雍とされる如きものの継承ではないようである。

後漢書、張衡伝注に引かれている河図に、先掲のとはやや異なったものがある。

天有九部八紀、地有九州八柱、東南神州曰農土、正南邛州曰深土、西南戎州曰滔土、正西兪州曰并土、正中冀州曰白土、西北柱州曰肥土、北方玄州曰成土、東北咸州曰隱土、正東揚州曰信土、

(河國括地象―緯書集成、河図類 P1)

そして、これは、淮南子に次の如くあるものと軌を一にしている。

何謂九州、東南神州曰農土、正南次州曰沃土、西南戎州曰滔土、正西兪州曰并土、正中冀州曰中土、西北台州曰肥土、正北濟州曰成土、東北薄州曰隱土、正東陽州曰申土、

(淮南子、墜形訓)

今、これを諸本と対照してみると、次の如くなる。

（淮南子を底本としての対照表。○印は同類を示す。）

| 淮南子 地形訓 | 河 図 | 河 図 括 地 象 | 古 微 書 注 引 | 河 図 括 地 象 | 初 学 記 注 引 |
|----------|-----------------|-----------|-----------|---------------|-----------|
| | 後 漢 書 張 衡 伝 注 引 | 古 微 書 引 | 或 本 | 初 学 記 引 (州のみ) | 或 本 |
| 東南—神州—農土 | ○—農土 | ○—農土 | 辰 土 | ○ | |
| 正南—次州—沃土 | 邛州—深土 | 迎州—深土 | 沃 土 | 邛 州 | |
| 西南—戎州—滔土 | ○—○ | ○—○ | | ○ | |
| 正西—兗州—并土 | ○—并土 | ○—○ | | ○ | |
| 正中—冀州—中土 | ○—白土 | ○—白土 | 中 土 | ○ | |
| 西北—台州—肥土 | 柱州—○ | 柱州—○ | | 括 州 | 柱 州 |
| 正北—濟州—成土 | 玄州—○ | 玄州—○ | 濟 州 | ○ | 玄 州 |
| 東北—薄州—隠土 | 威州—○ | 威州—○ | | ○ | 威 州 |
| 正東—陽州—申土 | 揚州—信土 | 揚州—信土 | 申 土 | ○ | |

上表により、大略、緯書が淮南子の九州名を襲うたものであることは明白である。ただ淮南子の九州なるものが、前後の文面より考えるとき中国全土に相当するものとして九州を配分しているのに対し、緯書の場合は、赤鼎の州（小九州）の中の九州として淮南子より拡大された地理的世界観の中の九州名と考えている点に相違がある。

ところで、緯書思想の全般的傾向の一つには、前漢時諸思想中、特に老莊及び淮南子などに見られる道家的思想を継承し、その中で独自の構成を立てたものであるであろうことは、別に明らかにしたところである。大九州説の構成も、またこれと同様な理由において、淮南子の構成が継承されたものと考えられる。そして、先に問題になった如き、神州、東南説の如きは、こうした経緯よりして、緯書の大九州説の中に導入せられてきたものであろう。

したがって、緯書の大九州説の構成は、前掲、史記に見る如き鄒衍の大九州説を基調とし、新たに淮南子に見る如き九州説を導入して緯書独自の構成をしたものと考ええるものである。

以上の考察にして大過なしとするならば、鄒衍の大九州説は緯書の九州説との関聯においていかに考えらるべきであらうか。また前節で見た如き疑問は、いかに理解さるべきであらうか。

緯書の大九州説は、鄒衍のそれを基調とし、さらに淮南子などに見られる如き九州説を導入し、当時の思想の集成的構成のもとに立てられていることは、前節で明らかにした通りである。したがって、鄒衍説そのままでないとしても、その考方の基調は継承されていることはいうまでもない。故にここでは、前節に見た如き緯書の大九州説と、鄒衍説のそれと比較して、鄒衍説に見られた諸疑問について考えてみたい。

まず、問題となることは、赤県神州についてである。これについて緯書では「赤県の神州」と考え、赤県を小九州とし、神州をその中の一州とし、これすなわち禹貢の九州なりとしていると、理解されることを指摘した。これは果して緯書だけの考え方で、鄒衍説にはなかつたものであるか。

今、緯書の大九州説を、史記鄒衍の大九州説に適用するかどうか。

まず問題となった「中国名曰赤県神州」は、「中国は名づけて赤県の神州という」となる。すなわち中国は、赤県九州（小九州）中の一州である神州に相当することとなる。

この神州は、大九州の八十一分の一に相当するため、儒者のいう中国の面積比に相当することとなる。したがって、

儒者のいう中国とは、この神州を指したものとなる。これすなわち禹の九州であるとされると考えられることは、妥当である。しからば、鄒衍の考える中国は、どうなるかが問題となる。前節の如き理解をするならば、結局、儒者の中国と同面積となり、彼が、儒者の中国観の狭小さを批判した点よりして、納得できない。

かくて考えられることは、鄒衍の場合でも、緯書の如く神州を含めた赤県をもって中国と見ていたのではなからうか。史記の如き表現では、いずれに読むとしても、彼のいう中国なるものの概念は明らかでないが、これは資料の稀小さと、表現の複雑さからくるものとして、またやむを得ないのではあるまいか。ところで緯書では、禹の九州名とは異なり、赤県の小九州名が、淮南子に見る如き九州名に準じて付けられていることは、前説でみた通りであるが、このことは、禹の九州を中国と見たそれ以前の中国観を、より拡大した世界観の中に求めたことを示しているのではあるまいか。すなわち、ここでは、中国なるものは、禹の九州の九倍もの広さにおいて理解されているのである。故に鄒衍の場合も「其語闊大不經」（史記鄒衍伝）とされる考え方からして同様な中国観が立てられたと見てよいであろう。すなわち「中国名曰赤県神州」という表現には曖昧なところもあるが、鄒衍の考えた中国も、神州をも含めた緯

書の赤鼎に相当するものではなかつたであらうか。

次に、赤鼎の州を九区の中央に位すると考えることは、緯書説中に見られることであるが、こうした考え方も、鄒衍説にはあつたであらうと考えられるのであるが文面には見られない。そしてこれは四夷との交流や、鬪争の漸く激しくなってきた漢代における中華思想のあらわれとして、前漢末頃形成されたと見られる緯書説に至つて、より明確にされたものと考えてよいのではなからうか。

次に問題とされるものに、神州東南隅説の問題がある。これは、史記の鄒衍説には見られぬもので、王充の論衡引用の鄒衍説に見られるものである。これについては、王充のがより完全な鄒衍説を引用しているという見方もできるのであるが、緯書の大九州説との関聯から見ても、ここでは別の理由を考えたい。先述もした如く、緯書では、神州東南隅説が明瞭にされ、それは淮南子の九州説を導入することにより形成されたものであることを指摘してきた。そして、この考え方は、御手洗氏(注15)が詳考されている如き古代人の地理的世界観の思想より導き出されてきたものであらうが、また一面、漢代における四夷との交流よりする現実的世界の視野拡大がもたらした地理的設定とも考えられよう。すなわち、東南に海を控え、西北に広がる大陸を現実的に見た当時の世界観よりすれば、神州すなわち禹貢九州の東南隅説が、自ら生れ出てくるのではなからうか。した

がって、鄒衍の世界観では、未だそうした考え方は無く、淮南子に見られる如く、その時代に漸くそうした考え方が明確にされ、緯書説において、それが構成の中に体系的に組み入れられたものとみてよいのではあるまいか。

故に、王充が引用する鄒衍説に東南隅説が入っているということは、こうして形成された緯書説が、鄒衍説に混入したものであらう。換言すれば、王充は、緯書説も鄒衍説の一部として、これを混入したのではあるまいか。すなわち、当時にあつては、緯書説は、鄒子一派の説と考えられていて、王充も、またそうした考えのもとに、これを鄒衍の大九州説の中に入れて考えたものではなからうか。今これがかく考えられる理由としては王充が、鄒衍の説及び緯書についてどのように見ていたかを考えてみたい。

まず鄒衍の説については次の如きものが見られる。
此言詭異、聞者驚駭、然亦不能_レ實_レ然否_一、相隨觀說
詭述以談、故虛實之事、並傳_二世間_一真偽不_レ別也、
(論衡、談天篇)

案、禹之山経、淮南之地形、以察_二鄒子之書_一虚妄之言也、
(同 右)

此言殆虚、地形難_レ審、假令有_レ之、亦一難也、

(論衡、難歲篇)

これらは、鄒衍九州説に対する批判であるが、等しく、これを虚妄の言なりと考えている。それ故、又

齊有^三鄒衍之書、瀆洋無^二涯、其文少^レ驗、多^二驚耳之言^一、案、大才之人、率多^二侈縱^一、無^二實^レ是之驗^一、華^レ虛謗^レ誕、無^二審察之實^一、

(論衡、案書篇)

と批判し、「吉凶之書、伐^二經典之義^一、工伎之說、凌^二儒雅之說^一」(論衡、難歲篇)として、鄒衍の説も、また方士一流の説として、儒家の伝統的な説を伐凌するものと大いに反駁しているのである。

これに対して、緯書の説に対しては、

其言神驗、文又明著、世儒學者、莫^レ謂^レ不^レ然、如實論^レ之、虛妄言也、

(論衡、奇怪篇)

此皆虛也、案、神怪之言、皆在^二讖記^一、

(論衡、實知篇)

として、神怪、虚妄の言なりとし、案書篇では、三鄒の書と共に讖書をも引き続き批判し工伎術数を司るものの為す言と見ていたようである。こうした鄒衍説及び緯書に対する王充の考方からすれば、直接両者を結びつけた立論はしていないが、両者の間に、密接な關聯を考え、その説の、同じく虚妄なることを批判しているところより見るとき緯書の如きは鄒子一派も含めた「^(注16)巧慧小才伎數之人」の立てた虚妄の説と見ていたのではあるまいか。

上述の如くであるとすれば、大九州説において、鄒衍説と緯書説と同類のものとして、彼の引用の鄒衍説の中に、

緯書の東南隅説が混入することは充分考えられ得ることであろう。

以上により、緯書の大九州説と鄒衍説との關係を考察し、鄒衍説に見られる諸疑問についてこれを明らかにしてきたのであるが、次にこの種緯書形成の事情、及び時期などにつき考察して、本論考を結びたい。

四

緯書の大九州説は、鄒衍説そのままでないことは、前節の通りである。しかし、その内容が鄒衍説を基調としていられることは、これが鄒子一派の人々の為すところであろうとされる理由を充分にしている。ここに、緯書と方士との密接な關係が見い出される一理由もある。そして、王充の言う如く、当時にあつては確かに虚妄の言とさるべき見方もあり、また伝統的な儒家思想の立場からして、排撃さるべきものであつたであらう。しかしながら既に述べた如く、現実的世界の視野の拡張に伴なう地理的世界觀の發展的構成という点より見れば、淮南子などの九州説をも導入して形成された独自の緯書の大九州説は、極めて体系的であると共に、当時としては進歩的合理的な地理的世界觀といわねばならない。それ故に、これは、単に一部方士達の為にした虚妄の説とのみ考えられない。さらにそれが当時の思

想の集成的構成である点より見て、従来の儒家的思想のみによる解釈では、九州という如き地理的世界観は満足な理解が得られず、ここに時代思想をも導入した新思想としてこの種緯書の大九州説がある思想家達によって形成せられたものでなからうか。そしてこれは、別に「緯書」における生成論の考察」において見た如く、燕齊今文学派の系統の者が、そうした人々として考え得るのではなからうか。特に大九州説の如く、同じく齊の出身である鄒衍の説を継承した緯書説からすれば、なおさらそうした推考がされ得るものである。

緯書形成事情を上述の如くとするならば、果して、その時期はいつ頃であったであらうか。その神州東南隅説よりして、王充（二七—一〇九）の頃には既に形成されていたことは考えられる。そして、淮南子の九州説の影響が見られるところより、それ以後、すなわち、緯書一般に見られる如き前漢末説が考えられよう。

ところで、桓寛の塩鉄論に論鄒篇があり、そこに所謂中国者天下八十一分之一、名曰三赤神州一、而分爲九州一、絶陸不通、乃爲二州一、有二大瀛海一圍之、
其外一、此所謂八極、而天下際焉、

というのがある。ここでは、四夷諸国を攻略統治すべき経国の大道を強調した大夫側が、四海に通達していた鄒衍の立論を推賞し、儒墨の狭小な見解を批判するために、鄒衍

の大九州説を取りあげているものであるが、この説は、史記に見る如き鄒衍説に止まり、未だ緯書に見る如き説にまで及んでいない。こうしたところよりみて、たとえ、上述の如き緯書の大九州説がその頃形成されていたとしても、未だ広く一般化していなかったのではなからうか。ここではむしろ鄒衍説が取りあげられ、議論されていることに留意すべきであらう。そして、こうした経緯より考えて、この種緯書説形成は前漢末、後漢初頃にかけて形成せられたものではなからうか。

以上、大九州説を中心にして、緯書の地理的世界観を見てきたのであるが、これに關聯してはなお、崑崙説、天地山川説など多くの問題があるのであるが、ここでは大九州説のみに止めて、他は次の機会に譲りたい。

（二九六一、四、二〇）

〔注1〕 橋本増吉氏「鄒衍の世界観」（東亜叢書、第五輯）、御手洗勝氏「地理的世界観の変遷—鄒衍の大九州説に就いて—」（東洋の文化と社会、第六輯）

〔注2〕 前掲の論叢では先ず張守節の正義による解明から出発されているため、却って理解が煩瑣になっている。

〔注3〕 御手洗氏の論文中、張守節、正義の「言一州東有裨海、環繞之、凡天下有九州、有大瀛海、環繞其外、乃至天地之際也」を解して、「九州の内、一州は中央に位し、他の八州はこれを取囲むようにその外に配列し云々」とされているが、この文からはそうした解釈は出て来ない。

〔注4〕 劉盼遂者、「論衡集解」P 219注文。

〔注5〕 同書 P 494注文。

〔注6〕 御手洗氏論文では「王充の理解した大九州は、司馬遷の一区の世界に過ぎない」とされているが、私は大九州を理解したものと考える。

〔注7〕 緯書と方士との関係については、顧頡剛氏の「秦漢的方士与儒生」の詳考がある。緯書形成の一ケースとしては、拙稿「緯書に於ける宇宙論の考察」(中国学会報第十二集掲載予定)中の「講經的緯書形成の一側面」参照。

〔注8〕 陳槃氏、「論早期讖緯及其鄒衍說之關係」(歴史語言研究所集刊一第二十本)参照。

〔注9〕 漢学堂叢書引、清河郡本「鄭氏注曰、広被不遺、之謂括象猶貌也、審諸地勢、措諸河図」

〔注10〕 古微書、緯編、漢学堂叢書にはこの文を引くが、出典と

されている初学記卷五には「神州」の二字が無い。出典は、安居、中村共編、緯書集成をもって、これを示した。

〔注11〕 初学記卷八では、括は桂に、濟は營に、薄は咸に作っている。緯編もこの事を指摘している。古微書のは、又異なる事は緯書集成に掲載されている通りである。

〔注12〕 この資料は、緯書集成公刊後見出したものである。

〔注13〕 尚書、夏書、禹貢の九州名。

〔注14〕 前掲、拙稿、「緯書に於ける生成論の考察」参照。

〔注15〕 前掲、御手洗氏論文参照。

〔注16〕 後漢書、桓譚傳、「今諸巧慧小才伎数之人、增益図書、矯稱讖記、以欺惑貪邪、誑誤人主、」

〔注17〕 前掲、拙稿参照。

〔注18〕 塩鉄論、論鄒第五十三。